

京都大学人文科学研究所共同研究実績・活動報告書

(1年計画の1年目)

1. 研究課題

社会運動と社会教育の関係史 —1930-40年代の京阪地域に焦点を当てて—

History of the Relationship between Social Movements and Adult Education: Focusing on the Keihan Region in the 1930-40s

2. 研究代表者氏名

奥村 旅人

Okumura Takahito

3. 研究期間

2024年4月-2025年3月(1年目)

4. 研究目的

本研究の目的は、社会運動に参画した知識人が行った教育活動が、戦間期から占領期にかけてどのように展開したのかを検討することである。とりわけ、知識人による教育活動が活発に行われた京阪地域に焦点を当てる。この作業を通して、社会運動による社会変革を志向しつつ行われた教育活動における、戦前から戦後にかけての連続性や変容について考察したい。

社会運動と関係の深い教育活動、例えば「労働学校」や「政治学校」などについては、教育史学や社会教育学の領域において事例研究が蓄積されてきた。だがそこでは、個々の事例のなかで教育者＝知識人の思想が検討されることはあっても、社会運動史の歴史的文脈に論及されることはほとんどない。一方社会運動史研究においても、労働組合や無産政党が行った教育活動が考察の対象となることは稀であると言って良い。本研究は、上記の史的事実の解明を目指すとともに、社会運動史研究と教育史研究の知見を架橋することをも視野に入れ、両領域の地平を拡げることを企図するものである。

The purpose of this study is to examine how educational activities conducted by intellectuals who participated in social movements unfolded from the interwar period to the occupation period. In particular, we will focus on the Keihan region, where these activities were pursued with particular vigor. Through this work, we would like to examine the continuities and transformations in educational activities aimed at bringing about societal change through social movements from the prewar to postwar periods.

There is a corpus of case studies on the educational activities closely related to social movements, such as "labor schools" and "political schools," in the fields of education

history and adult and community education. However, although the ideas of educators/intellectuals are examined in each of these studies, they are rarely discussed in the context of the history of social movements. It is fair to say, that even in the study of the history of social movements, educational activities conducted by labor unions and political parties are rarely examined. This study aims to shine a light on the above and create a bridge between the findings of social movement history research and education history research with the intention of expanding the horizons of both fields.

5. 本年度の研究実施状況

本年度は、京都勤労者学園が所有する京都人文学園（1946-1956）関係資料調査、重山文庫が所有する新村猛関係書簡等の整理を進めつつ、班員が研究会を開催して各々の関心から研究成果をまとめることを目指した。

具体的には、京都勤労者学園での資料調査 8 回、研究会 3 回を実施した。加えて、京都人文学園と同時期に存在した各種学校である鎌倉アカデミアについても、鎌倉市図書館での資料調査を 2 回行った。

資料調査については、京都勤労者学園所蔵資料の整理・目録の作成をほぼ完了するとともに、重要資料の電子化を進めた。また、同学園所蔵資料と重山文庫所蔵資料の目録、及び班員の関連研究成果をまとめ、『人文學報』第 122 号に小特集として掲載したほか、班長の奥村は本共同研究における研究成果を含む単著を公刊した。

6. 本年度の研究実施内容

- 2024.5.23 京都人文学園に関する研究構想 司会 奥村旅人 教育学研究科 今後の展望 発表者 福家崇洋 発表者 須永哲思
- 2024.6.8 京都勤労者学園における資料調査 発表者 福家崇洋 資料の共有 発表者 須永哲思 発表者 奥村旅人 教育学研究科
- 2024.7.6 京都勤労者学園における資料調査 発表者 福家崇洋 資料の共有 発表者 須永哲思 発表者 奥村旅人 教育学研究科
- 2024.8.14-15 鎌倉市図書館における資料調査 創立期鎌倉アカデミアと京都人文学園 発表者 奥村旅人 教育学研究科 コメンテーター 須永哲思
- 2024.8.17 京都勤労者学園における資料調査 発表者 福家崇洋 資料の共有 発表者 須永哲思 発表者 奥村旅人 教育学研究科
- 2024.10.5 京都勤労者学園における資料調査 発表者 福家崇洋 資料の共有 発表者 須永哲思 発表者 奥村旅人 教育学研究科
- 2024.11.20 京都勤労者学園における資料調査 発表者 須永哲思 資料の共有 発表者 奥村旅人 教育学研究科
- 2024.12.11 京都勤労者学園における資料調査 発表者 須永哲思 資料の共有 発表者 奥

村旅人 教育学研究科

- 2025.1.16 京都人文学園と鎌倉アカデミアとの比較研究に向けて 司会 奥村旅人 教育学研究科 鎌倉アカデミア関係資料目録について 発表者 須永哲思 コメンテーター 福家崇洋
- 2025.1.28 京都勤労者学園における資料調査 発表者 須永哲思 資料の共有 発表者 奥村旅人 教育学研究科
- 2025.2.12 京都勤労者学園における資料調査 発表者 須永哲思 資料の共有 発表者 奥村旅人 教育学研究科
- 2025.2.14 京都人文学園の教育史研究への位置づけに関する検討 司会 須永哲思 京都人文学園・京都勤労者学園における「学生」 発表者 奥村旅人 教育学研究科
- 2025.2.26-27 鎌倉市図書館における資料調査 鎌倉アカデミア・京都人文学園への入学者の学歴と職歴 発表者 奥村旅人 教育学研究科 コメンテーター 福家崇洋
コメンテーター 須永哲思

7. 共同研究会に関連した公表実績

- ・「〈小特集〉 戦後京都と教育・文化運動 ―― 京都人文学園を中心に ――」『人文學報』第 122 号、2024 年、45-347 頁（小特集内に班員 3 名の単著論文、京都勤労者学園・重山文庫所蔵資料目録、資料翻刻 5 件を含む）。
- ・ 奥村旅人『労働学校における生の充溢：生涯教育の空間論序説』東信堂、2024 年（特に第 3 章）。

8. 研究班員

所内

福家崇洋、須永哲思

学内

奥村旅人(京都大学教育学研究科)

9. 共同利用・共同研究の参加状況

区分	機関数 (必須)	受入人数					延べ人数				
		総計	海外研究者	若手研究者 (40歳未満)	若手研究者 (35歳以下)	大学院生	総計	海外研究者	若手研究者 (40歳未満)	若手研究者 (35歳以下)	大学院生
人文研所 属 (内女性)	2	2 (0)	0 (0)	1 (0)	0 (0)	0 (0)	20 (0)	0 (0)	13 (0)	0 (0)	0 (0)
京大内 (人文研を除く) (内女性)	1	1 (0)	0 (0)	0 (0)	1 (0)	0 (0)	13 (0)	0 (0)	0 (0)	13 (0)	0 (0)
国立大学 (内女性)	0	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
公立大学 (内女性)	0	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
私立大学 (内女性)	0	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
大学共同利用機関法人 (内女性)	0	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
独立行政法人等公的研究機関 (内女性)	0	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
民間機関 (内女性)	0	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
外国機関 (内女性)	0	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
その他 ※ (内女性)	0	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
計	3	3 (0)	0 (0)	1 (0)	1 (0)	0 (0)	33 (0)	0 (0)	13 (0)	13 (0)	0 (0)
※「その他」の区分受入がある場合 具体的な所属等名称を記載：例）高校教員 無所属の場合は機関数0とカウントし、この欄の記載不要											

10. 本年度 共同利用・共同研究を活用して発表された論文数

	共同利用・共同研究による成果として発表された論文数			
			うち国際学術誌掲載論文数	
①人文研に所属する者のみの論文(単著・共著)	9		0	
②人文研に所属する者と人文研以外の国内の機関に所属する者の論文(共著)	2	(0)	0	(0)
③人文研以外の国内の機関に所属する者のみの論文(単著・共著)	3		0	
④人文研を含む国内の機関に所属する者と国外の機関に所属する者の論文(共著)	0	(0)	0	(0)
⑤国外の機関に所属する者のみの論文(単著・共著)	0		0	

本年度発表されたインパクトファクターを用いることが適当ではない分野等

	雑誌名	掲載論文数	掲載年月	論文名	発表者名
1	人文學報	1	2024.6	京都人文学園の形成と変容：知識人・労働者による教育空間と社会運動の関係史	奥村旅人
2	人文學報	1	2024.6	私立各種学校・京都人文学園の歴史：「人文主義の精神に依る教育」のゆくえ	須永哲思
3	人文學報	1	2024.6	戦後歴史学の明暗：渡部徹と社会・労働運動史研究	福家崇洋
4	人文學報	1	2024.6	新村猛と『世界文化』：1930年代京都のフランス的文脈を踏まえて	藤野志織
5	人文學報	1	2024.6	<資料目録 I> 京都勤労者学園所蔵京都人文学園関係資料目録	奥村旅人・ 須永哲思・ 福家崇洋
6	人文學報	1	2024.6	<資料目録 II> 吉田九洲穂旧蔵京都人文学園関係資料目録	須永哲思
7	人文學報	1	2024.6	<資料目録 III> 新村猛関係資料目録	奥村旅人・ 須永哲思・

					福家崇洋・ 藤野志織
8	人文學報	1	2024.6	<資料目録 IV>京都地方労働組合総評議会(京都総評)関係資料目録	福家崇洋
9	人文學報	1	2024.6	<翻刻資料 I>新村猛「民主戦線の諸問題」	藤野志織
10	人文學報	1	2024.6	<翻刻資料 II>講義ノート「一般教養(新村猛先生)(6.10 趣意書ニ依ル)」	須永哲思
11	人文學報	1	2024.6	<翻刻資料 III>簿冊「昭和二十一年度 審査合格者作文京都人文学園」	須永哲思
12	人文學報	1	2024.6	<翻刻資料 IV>「12月1日講師会議記録」(簿冊「京都勤労者学園の創立人文学園, 勤労協資料(渡部徹氏保存分)」内)	奥村旅人
13	人文學報	1	2024.6	<翻刻資料 V>新村猛「佐々木時雄弔辞」	福家崇洋
14	人文學報	1	2024.6	<翻刻資料 VI>「人文学園創立 30 周年の集い」	奥村旅人

11. 本年度共同利用・共同研究による成果として発行した研究書

	研究書の名称	編著者名	発行年月	出版社名	国際共著
1	労働学校における生の充溢 生涯教育の空間論序説	奥村旅人	2024.12	東信堂	

12. 博士学位を取得した学生の数

なし

13. 研究成果公表計画および今後の展開等

本共同研究では、主に京都人文学園に焦点を当てて戦後日本の教育・文化運動の諸相を検討した。その過程で、同学園の「後継」団体である京都勤労者学園・京都労働学校（1957-現在）に関する資料が発見され、現在その資料群の整理も進めている。今後は、研究の射程を高度経済成長期にまで伸ばし、戦後京都における教育・文化運動に関する研究をさらに進めたい。

また、京都人文学園の比較対象項として鎌倉アカデミア関係資料の調査も進めた。調査を進める中で、鎌倉アカデミアと京都人文学園との比較検討に関する視座を構築しつつある。こうした視座からの研究成果は、鎌倉アカデミア関係者と繋がりを持つ鎌倉市図書館と共同しつつ、来年度以降に公表する予定である。